

恭仁宮と恭仁京の主軸

古 川 匠

2021 8月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

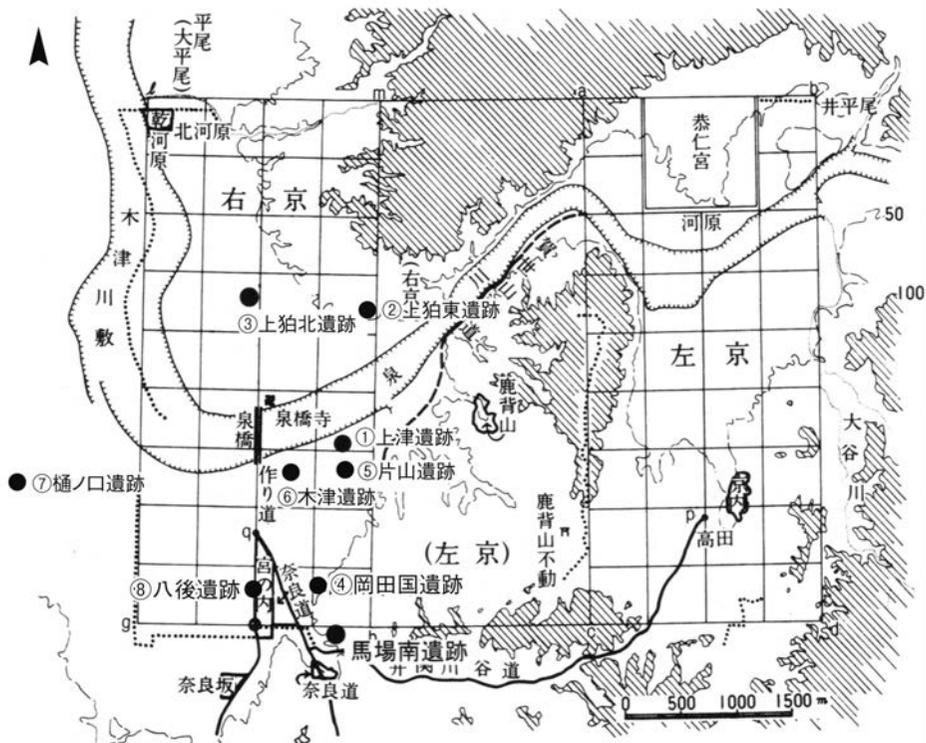
恭仁宮と恭仁京の主軸

古川 匠

1. はじめに

奈良時代中頃の天平12(740)年から同16(744)年まで存続した恭仁京については、存続期間がごく短期で、かつ発掘調査事例が他の都城と比べて少ないことから、不明な点が多い。むしろ、情報量の少なさがゆえに、条里地割を活用した多様な復元案が提示されているのが恭仁京研究の特徴の一つである。

恭仁京域に比定される地域では、左京域では真北からわずかに西に振る条里地割が残り、右京では逆に真北からわずかに東に振る条里地割が残る。足利健亮はこの地割に即し、左京と右京が「ハ」の字状となる独特の復元案を提示(足利1969・1973ほか・第1図)したが、



第1図 足利説恭仁京・関係遺跡位置図(足利1969・1973を元に作図された筒井2012を一部改変)

その後、奥村清一郎によって、右京域にも、恭仁京期に遡る可能性の高い、左京域と共通する真北からわずかに西に振る主軸の地割が存在することが指摘された(奥村1980)。以降の研究では、右京域も左京域と平行し、真北からわずかに西に振る主軸とする復元案が主である。

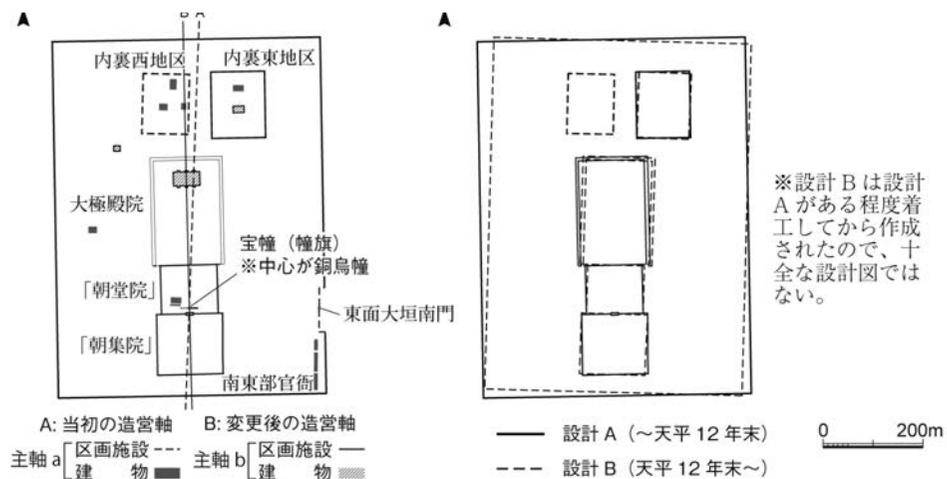
一方の恭仁宮では、京都府教育委員会による発掘調査が毎年少しずつ積み重ねられてきた。平成26年度から30年度まで調査を担当した筆者は、この成果をもとに、宮域の変遷過程について施設の主軸方向の変化から整理を試みた(古川2020 a・古川2020 b)。

本稿では、宮の変遷過程を追った手法を応用して京域についても主軸方向の変遷を分析し、宮・京域の主軸方向について、総合的な把握を試みる。

2. 恭仁宮の主軸変化

恭仁宮では、宮を構成する構造物に、2種類の主軸が存在する(第2図左)。一つは、座標北から約0.5~1.5度東偏する主軸 a、もう一つは、座標北から約1~2度西偏する主軸 b である。2つの主軸の存在は以前から知られていたが、この主軸が前後関係を示すものか、あるいは宮の造営集団の違いを示すのか、長らく不明であった。筆者は、下記の検討から、主軸 a が古く、恭仁宮で最初の主軸方位と位置づけた(古川2020 a)。

天平13(741)年正月に恭仁宮で最初に実施された元日朝賀に伴う宝幢(幢旗)遺構と、その北西に位置する、元日朝賀に伴う楼閣と想定される総柱建物(古川2020 b)は、主軸 a で設計された。ほかに主軸 a の施設は、内裏西地区のすべての建物と四周の区画、内裏東地区の後殿、東面南部大垣、東面大垣南門、南東部官衙である。主軸 b の施設は、内裏東地



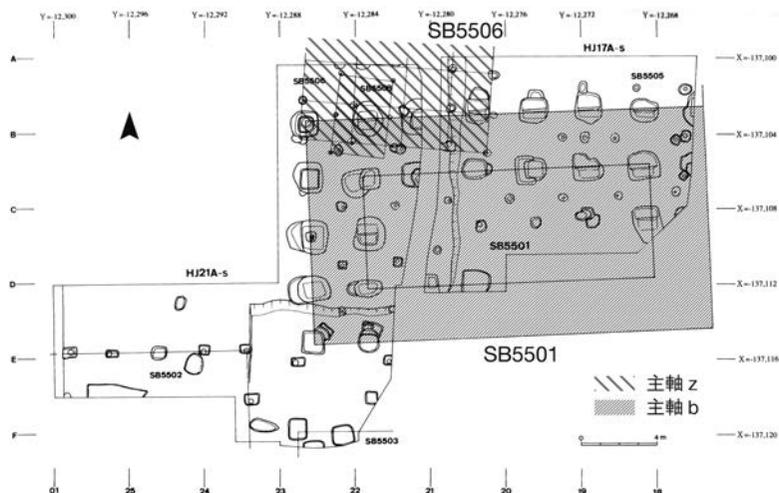
第2図 恭仁宮における主軸変化と2つの設計

区の後殿以外のすべての建物と区画、大極殿及び大極殿院回廊、朝堂院地区区画、朝集院地区区画、東面南部以外的大部分の大垣である(第2図左)。

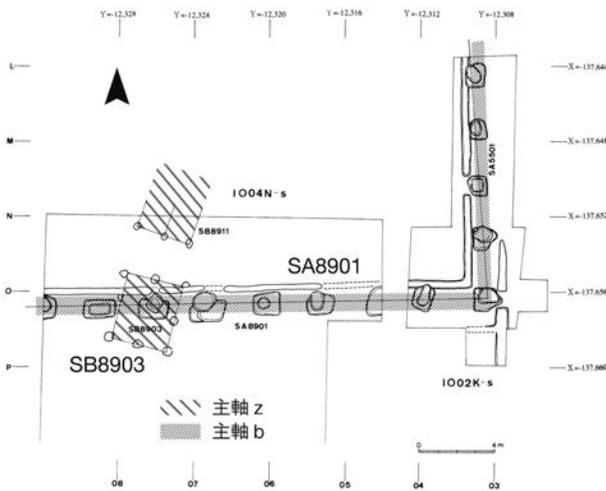
主軸 a を採用する遺構は、続日本紀に記載される実年代から考えて明らかに先行する。主要な施設として、天平12(740)年12月の遷都からわずか半月後に実施された元日朝賀に伴うと考えられる宝幢(幢旗)遺構と総柱建物が該当する。一方、主軸 b を採用する主要な遺構は、天平14(742)年中に完成した大極殿と大垣の大部分が挙げられ、主軸 a より後出する。

そして、内裏東地区と朝堂院地区の遺構をみると、内部の建物が主軸 a で、区画を圍繞する区画施設は主軸 b を取る。通常、建設工事は、区画内部の建物から造り始めるものであるから、建設工事中で主軸が a から b に変更されたと判断するのが妥当な解釈であろう。すなわち、遺構の変遷からも、主軸 a が古く、b が新しいと判断されるのである。

さらに、宮の中心軸(以下、造営軸)に注目する。造営軸復元の根拠となるのは、宝幢(幢旗)と大極殿である。7本の宝幢(幢旗)の中心に位置する銅鳥幢は、他の宮の検出事例から、宮の造営軸上に必ず設置されるべきものである。したがってこの場合、推定される銅鳥幢の位置から、主軸 a の方向に南北に延ばしたラインが恭仁宮の造営軸となる(造営軸 A・第2図左点線)。造営軸 A を北に伸ばすと、大極殿中心より大きく東にずれる。一方、主軸 b を採用する大極殿の中心にも、宮の造営軸がとおるはずである。したがって、大極殿中心から主軸 b に平行して南北に延ばしたラインも、恭仁宮の造営軸となる(造営軸 B・第2図左実線)。しかし、造営軸 B を北に延ばすと、大極殿院北方の内裏西地区が造営軸 B に重複してしまう。



第3図 恭仁宮跡内裏東地区H J 7A-s・H J 21A-s トレンチ(森編2000を加工)



第4図 恭仁宮跡朝集院地区IO04N-sトレンチ(森編2000を加工)

これまで、恭仁宮の造営軸は造営軸Bしか想定されていなかった。古代の宮の理念として、平面形態は左右対称であるべきだが、内裏西地区が造営軸Bにかかってしまうことは、恭仁宮の設計のいびつさを際立たせ、その理由は不明であった。しかし、上記の検討によってその理由が明らかになったと考える。すな

わち、本来、造営軸Aを基準として諸施設が主軸aで造りはじめられていた恭仁宮が、途中で造営軸B及び主軸bに変更されて造営されたことから、恭仁宮には造営軸A・Bを基準とする主軸a・bの建物が混在し、左右対称の原則が破綻した、いびつな構造となってしまったのである。

恭仁宮は、造営軸Aを基軸とする旧設計Aと、造営軸Bを基軸とする新設計Bが、期せずして混在してしまった宮であると言える(第2図右)。

では、恭仁宮以前の主軸はどうか。遺構の重複関係から確実に恭仁宮期以前と考えられる建物は、内裏東地区H J 17A-s・H J 21A-s トレンチのS B 5501に切られるS B 5506(第3図)、朝集院地区I O04N-s トレンチの掘立柱塀S A 8901に切られる掘立柱建物S B 8903(第4図)等が挙げられる。これらの建物の主軸方位は、報文には記載されていないが、明らかに主軸aよりもさらに東偏している。ほかにも同様の遺構は宮内に点在し、遺構の重複関係からも、主軸a、bの遺構より古いと考えられる。

上記の遺構は、恭仁宮の施設と比較すると、柱穴の規模は小さく、柱穴の平面形態は円形である。遺構の規模から、用いられた柱材も小径材と考えられるため、一般集落の家屋や、恭仁宮造営工事に伴う仮設の雑舎の遺構と考えられる。したがって、恭仁遷都以前の集落の遺構も一部含まれるのであろう。これらの遺構の主軸方位は、個々の主軸はまちまちであるにせよ、座標北よりも2度以上東偏するという大まかな共通点がある。主軸zとする。

アルファベットの順番と造営順が異なるが、主軸zは恭仁京遷都の天平12(740)年以前、主軸aは天平12年、主軸bは天平13(741)年以降と考えられる。そして、こうした宮域での主軸方位の変化は、京域の造営とも関係するはずである。特に、右京域の主軸の位置付

けは大きく変わりうる。宮域の主軸 a は、足利健亮が当初指摘した、右京域の主軸方向とほぼ合致するためである。主軸 a は、ごく初期段階とはいえ、恭仁宮では明らかに存在した。冒頭で述べたとおり、京域の復元研究では、奥村清一郎による足利への反論以降、左京及び恭仁宮大極殿と方位の異なる真北から東に振る右京の条里地割は省みられなくなったが、宮域における調査成果は、その再考を促すものとなるだろう。

3. 「恭仁京域」の主軸変化

以上の、宮域での検討と新たな問題意識を踏まえ、「京域」の遺跡でこれまで検出された遺構の方位を検討する。京外の樋ノ口遺跡以外は、すべて足利建亮による復元案の右京域の範囲に所在する。

①上津遺跡第2次(平良・奥村ほか1980)・第3次(松本1981 a)(第5図)

木津川南岸に面した自然堤防状に立地する上津遺跡は、第2次調査で、多彩陶器や銅製獸脚付容器といった特殊な遺物や、瓦凸面に「泉」と線刻した丸瓦が出土したことから、同報告では、平城京外港「泉津」と関連する官の施設とされる。また、平城宮Ⅲ期の遺物が多く出土し、平城宮Ⅵ期以降の遺物は出土しないという特徴がある。第2次調査では、各主軸の建物遺構が検出され、さらに、変遷について、報告書で重要な指摘がなされている。

主軸 a の遺構では、第2次掘立柱建物 S B 09 と S B 05 が検出された。特に S B 09 は桁行4間、梁行4間の庇付大型建物である。このほか、焼土坑、土坑が検出された。平城宮Ⅲ期を中心とする時期に位置づけられる。

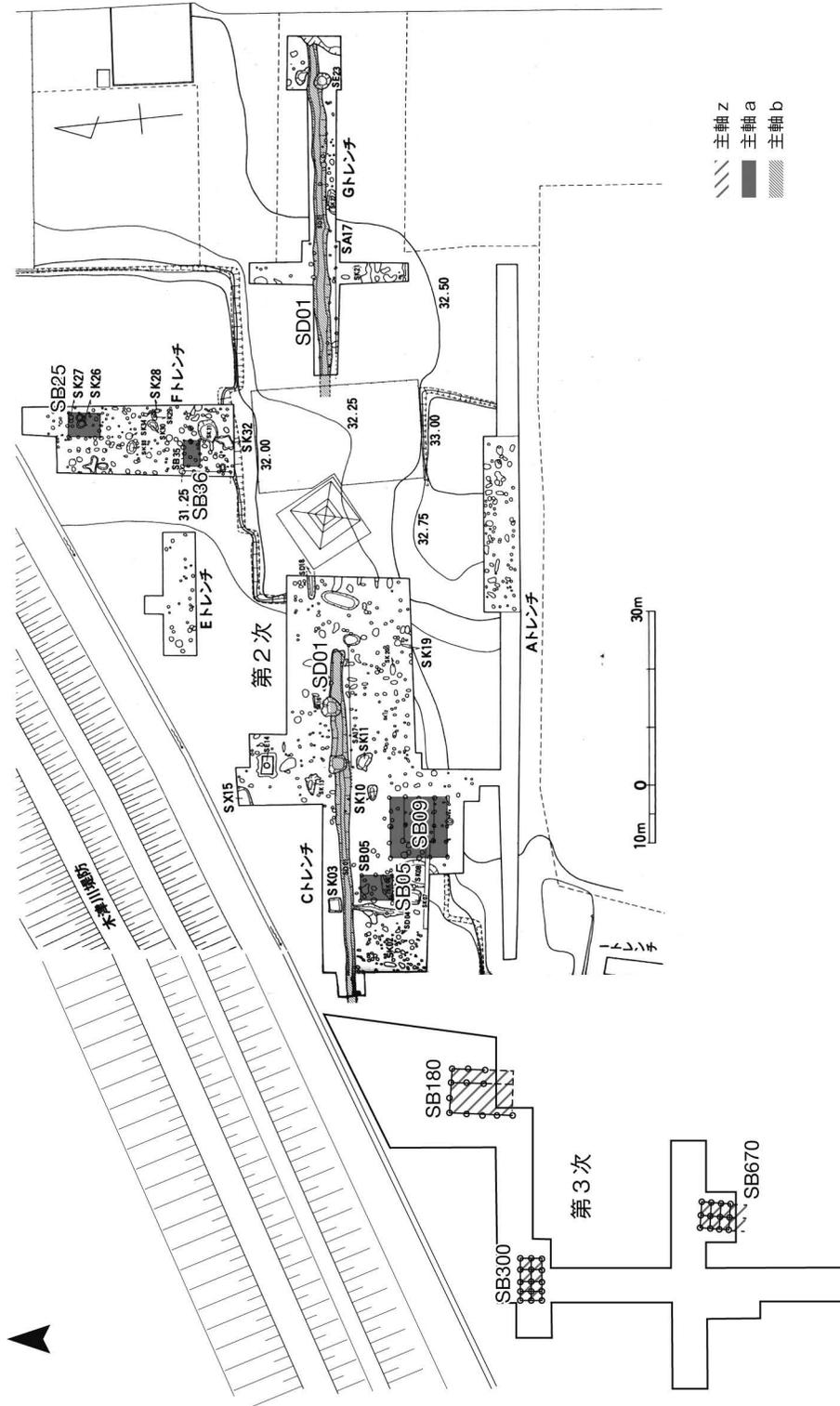
主軸 b の遺構は、第2次溝 S D 01、18、柵 S A 17 が挙げられる。溝 S D 01 は東西総延長166m、最大幅3.0mに及ぶ。埋土内には平城宮Ⅲ～Ⅴ期の遺物を含む。溝 S D 01 の埋没年代は平城宮Ⅴ期をさほど下がらないと考えられる。

また、恭仁京期以降の主軸 a の遺構は、第2次掘立柱建物 S B 25、35、36 が挙げられる。平城宮Ⅴ期の遺構群で、いずれも小規模な建物である。

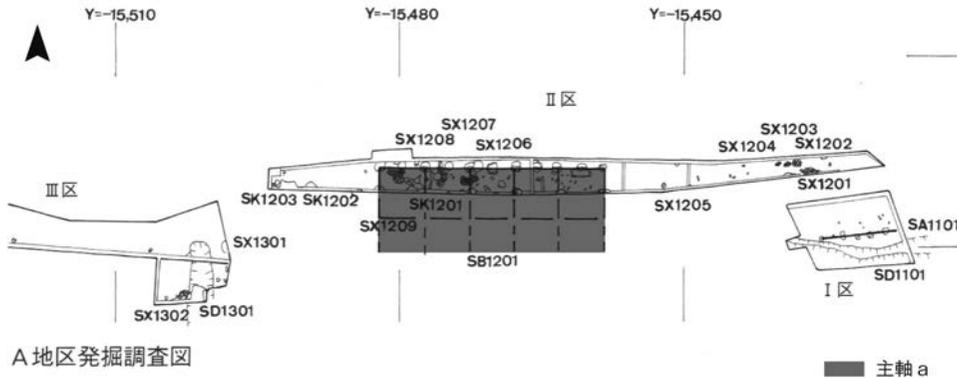
主軸 z の遺構は、第3次掘立柱建物 S B 180、S B 670 である。柱穴平面形状が円形で、恭仁京期以降の建物遺構とは異なる。出土遺物が乏しいが、周囲の遺構は平城宮Ⅲ期を中心とする遺物が出土する。平城宮Ⅱ期以前の遺物は出土しない。この他に、ほぼ正方位の S B 300 も柱穴平面形状が円形の建物であることから、同時期の可能性がある。

②上狛東遺跡(中島・永澤2001・第6図)

上狛東遺跡では、主軸 a の掘立柱建物 S B 1201 が検出された。桁行10間×梁行2間以上の東西棟掘立柱建物跡で、柱穴が掘り込まれる整地層及び周辺遺構の出土遺物の時期が、平城宮Ⅱ～Ⅲ期である。高麗寺跡の寺域北東方に位置し、足利健亮の案(足利1985)では、



第5図 上津遺跡第2・3次調査区平面図(平良・奥村ほか1980・奥村ほか1981aを合成・加工)



第6図 上狛東遺跡調査トレンチ(中島・永澤2001を加工)

四条東京極ラインに面した区画となる。発掘調査報告者は、南に隣接する、創建が飛鳥時代に遡る高麗寺の主軸が正方位を向くことと条里地割の主軸方向が一致することに注目し、高麗寺が京内寺院となったことと、高麗寺周辺の地割が恭仁京右京域の地割と一致することの関係を想定している。

③上狛北遺跡第2次(筒井ほか2012・第7図)

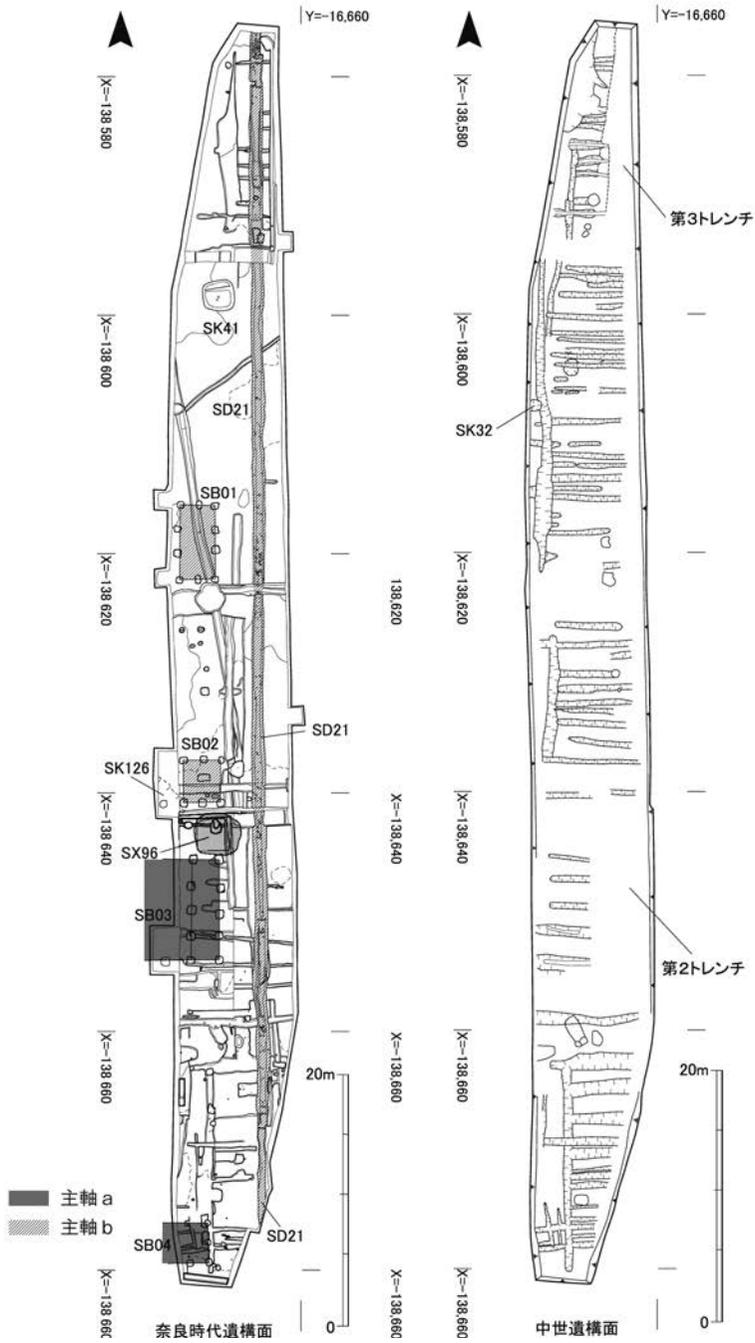
主軸 a の遺構として、S B 01、03が挙げられる。S B 03は木簡を含む大量の遺物が出土した土坑 S X 96の埋没後に建てられている。S X 96出土遺物は平城宮Ⅲ期前半に位置づけられ(筒井・松尾2014)、S B 03の年代の上限ともなる資料群である。

主軸 b の遺構としては、全長100mを超える溝 S D 21がまず挙げられる。出土遺物の時期は平城宮Ⅲ期の中段階から新段階に位置づけられる。先に上げた S X 96よりもやや新しい様相を示す。このほか、掘立柱建物 S B 02、04も主軸 b である。主軸 a を採る S B 01、03とは主軸方向が異なるが、主軸の違いはあれ、各建物は東辺をそろえるような配置となっており、建築時期は前後したとしても、同時に存在していた可能性が高い。

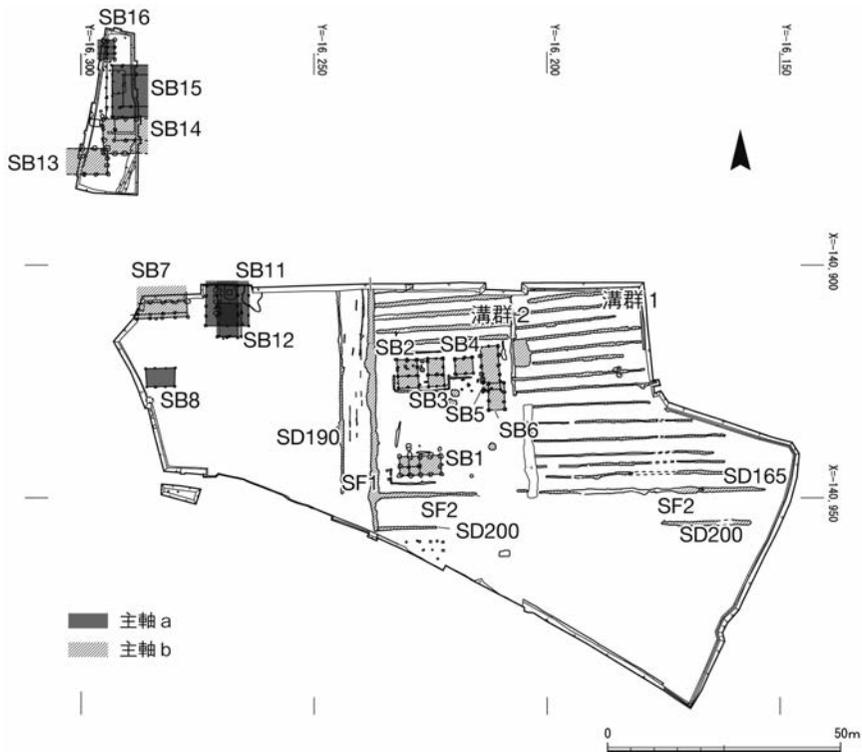
なお、第7図右は中世の遺構面であるが、一面に分布する素掘り小溝群の主軸方向は、調査区南部をのぞく大部分が、真北から東に振る主軸 a である。奈良時代以降に主軸が b から a に変更されていることがわかる。

④岡田国遺跡第3次～第6次(福山・筒井ほか2020・第8図)

岡田国遺跡では、主軸 b を採用する建物群、道路遺構、耕作溝あるいは悪水抜き溝と考えられる溝列が検出されている。出土遺物の時期から恭仁京期と想定される。道路 S F 1、S F 2の交差点北東に位置する掘立柱建物 S B 1～6は、近接して方位と柱筋をそろえて計画的に配置され、建物群の範囲は平城京における1/16宅地に相当するという。このほか



第7図 上粕北遺跡調査トレンチ(筒井ほか2012を加工)



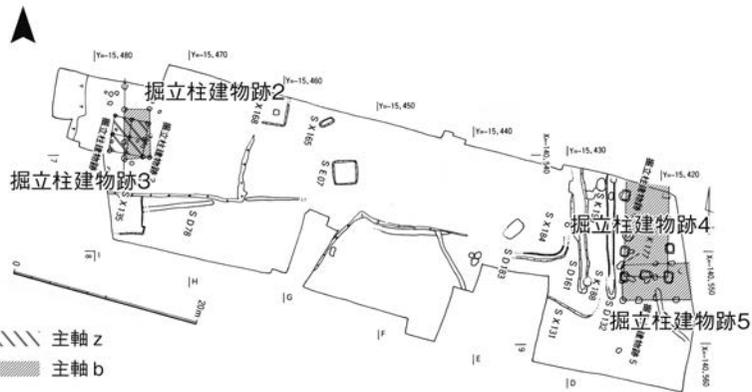
第8図 岡田国遺跡第3～6次調査区平面図(福山ほか2020を加工)

にも、SB7など、主軸bを採用する建物遺構の一部が調査区端で検出されており、奈良時代の遺構はさらに外に展開するようである。

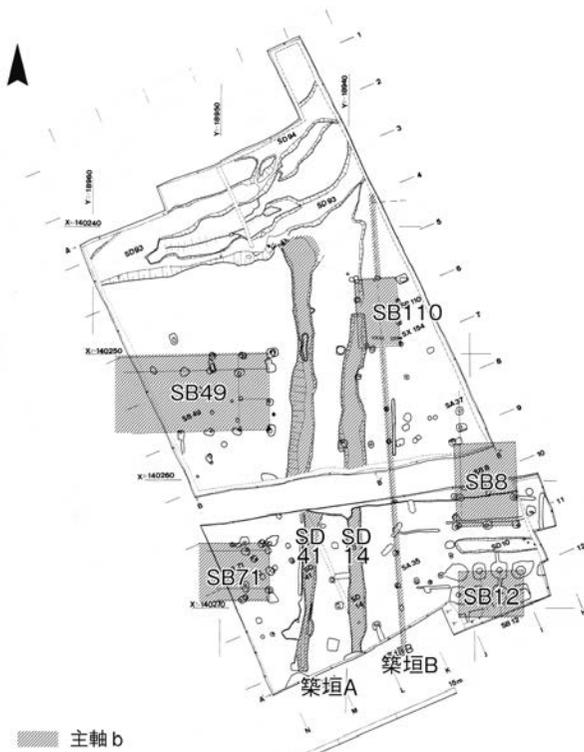
主軸aの建物遺構は、SB8、11、12、15、16が挙げられる。報告書では、平安時代前期の9世紀後半から10世紀前半頃の建物とされ、南都寺院と関連する木屋所や蘭地、あるいは初期荘園の施設に関連する可能性が指摘されている。

⑤片山遺跡第2・3次(伊野・筒井2005・第9図)

上津遺跡の南に位置する片山遺跡では奈良時代の掘立柱建物4棟、溝3条、井戸1基が検出されている。掘立柱建物のうち、桁行4間以上、梁間2間に復元される南北棟の大型の建物4と、4と重複する桁行3間以上、梁間2間の東西棟の建物5は主軸bを採る。また、溝は、重複するSD132・157と、SD132の西に平行するSD161があるが、いずれも主軸bを採る。井戸SE07の周辺には遺構が検出されていないが、周辺が大きく削平されたためであるとされる。SE07の埋土は溝SD132や161の整地土と類似する。このほか、主軸bを採る建物が1棟検出されている。南北2間、東西1間以上の建物2である。さらに、主軸zの建物は、2間四方の総柱掘立柱建物である建物3である。建物2と3は位置が



第9図 片山遺跡第2・3次調査区平面図(伊野・筒井2005を加工)



第10図 樋ノ口遺跡第1次調査平面図(伊野1992を加工)

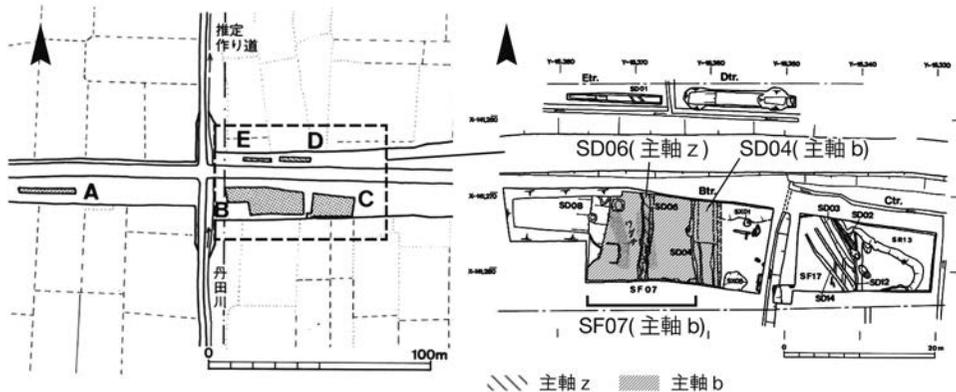
⑦樋ノ口遺跡(伊野1992・第10図)

京域から西にはずれた、現在の精華町山田の丘陵裾部に立地する遺跡である。現在の遺跡名は上川原遺跡である。主軸bを採る遺構として、まず、SB12が挙げられる。総柱の

重複するが、遺構の先後関係は不明である。平城宮Ⅲ期からⅤ期の遺物が出土している。発掘調査範囲の中心的な施設は建物4であるが、報告書では、奈良時代中頃から後半にかけて存在したとされている。

⑥木津遺跡第1次(松本1981b)

現在の木津川市木津町の市街地と重複する遺跡である。第1次SB01は、主軸aの礎石建物である。根石群が廃棄土坑として再利用され、その中に含まれる土師器、須恵器の年代は須恵器壺G、土師器皿Cの形態及び調整技法から平城宮Ⅴ期に比定される。



第11図 八後遺跡調査区平面図(岩松1988を加工)

掘立柱建物で、規模は東西3間、南北2間以上である。柱穴は、一辺1mで方形である。SB49は、東西棟(W1度S)の掘立柱建物で、掘形内に瓦が多数廃棄される。東西3間以上、南北2間の規模で、北に1間の庇が付く。SB71は、東西棟で、東西1間以上、南北2間の規模である。そして、南北方向(N0度30分W)の溝SD41が挙げられる。報告書では、これらの建物は、瓦葺の築垣(築垣A)に囲まれた施設とされる。

遺物では、彩釉陶器や二彩瓦をはじめ、非常に多くの遺物が出土した。瓦は平城宮に使用されたのと同じ型式で、土器は平城宮Ⅲ・Ⅳ期に主体が置かれる。報告書では、恭仁宮・京期に並行し、さらに継続したと評価されている。一方、瓦は平城宮Ⅱ期に主体があるが、恭仁宮遷都に伴って、平城宮から瓦が運ばれたと考えると時期差の説明が可能と調査担当者は解釈している。

遺跡は平城宮Ⅴ期以降にも存続し、主軸bの掘立柱建物SB8とSB110が検出されている。また、前段階から存在したSB12は継続して使用された。小規模な建物SB110は南北方向の柵(築垣B)に取り付いており、門であった可能性が想定されている。

樋ノ口遺跡の性格については、離宮説と寺院説を唱える論者の間でこれまで議論が交わされてきたが、まだ決着はついていない。いずれにせよ、出土遺物の時期から、恭仁宮造営期に成立した施設の遺跡であることは確実視される。

⑧八後遺跡(岩松1988・第11図)

恭仁京の復元研究にあたって、多くの研究者が右京の主要南北道路とする、現代まで残る地割「作り道」の両脇を調査した事例で、特に東部のB・Cトレンチで恭仁京期の可能性のある道路遺構が検出されている。Bトレンチでは道路SF07の路面上で平行する轍痕が検出され、SF07の東側溝と考えられる溝SD04が検出された。SD04の主軸方位はほ

ぼ正方位であるが、わずかに西に振るように図では表現されるため、主軸bと判断する^(注3)。さらに、SF07の路面下面では主軸zの溝SD06が検出された。道路整地層よりは新しいため、路面下であっても、主軸bのSD04、SF07とはほとんど時期差は無いようである。

小 結

以上の「京域」での発掘調査成果から、遷都以前と廃都後の主軸方向の変化を時系列に沿って整理する。

主軸zは、平城京から恭仁京への遷都直前まで存在した。主軸zの下限は平城宮Ⅲ期である。そして、主軸aは平城宮Ⅲ期前半から中頃の、恭仁京期と平行しうる時期である。主軸bは、恭仁宮期の平城宮Ⅲ期中頃から、奈良時代末の平城宮Ⅴ期までである。3つの主軸は極めて短期間に変遷しており、各時期の建物等は、実際には同時併存しうる。そして、平城宮Ⅴ期以降、主軸aに戻り、その後継続する。ただし、条里地割からみると、主軸aにならず、主軸bがそのまま継続した地点も部分的に存在したようである。

4. 恭仁宮・京の主軸変化の時期とその評価

上述の、右京域における遺構の主軸方向の変化とその時期は、実は、上津遺跡第2次調査の報文(平良・奥村ほか1980)で示された見解と一致している。すなわち、上津遺跡の調査で得られた主軸の変遷観は、「右京域」の広い範囲で応用が可能ということである。さらに付け加えると、同報文では、恭仁京期に条里地割と恭仁京条坊地割とが混在していた可能性^(注4)についても言及し、先駆的な見解を示している。

そして、こうした主軸方位の切り替えが、恭仁京外に位置づけられる樋ノ口遺跡までも含む広範囲で認められることは、国家の一大プロジェクトであった恭仁宮・京造営との強い関連性が想定される。ただし、実質3年半という、土器編年の一小期のなかに収まってしまう恭仁宮・京の存続期間の短さから、主軸の変化が確実に恭仁宮・京期に帰属させられるのか、これまで不明であった。しかし、筆者が行った宮域の検討を元にすれば、主軸変化を1年単位で認識することさえも不可能ではない。

一方、恭仁宮期前後の遺構が希薄な宮域の検討では恭仁宮の存続期間内の変遷しか把握できないが、恭仁京期以降もなお活発な土地利用が継続した右京域での調査成果からは、より中長期的な視点から検討することが可能となる。ここで、宮域及び京域での調査成果を相互補完的に活用すると、主軸zは恭仁京遷都の天平12(740)年以前、主軸aは天平12(740)年、主軸bは天平13(741)年から780年頃まで、主軸aへの「復帰」は780年頃以降と位置づけられる。

主軸aは恭仁京域においても、宮域と同様に造営初期の主軸方位であり、この主軸に即

した京域の確定もなされたであろう。しかし、これも宮域と同じく、初期の段階で京域の主軸は主軸 b に変更された。右京域で主軸 a と主軸 b の地割が混在するのは、こうした事情が反映されたものと推測する。そして、主軸 b は奈良時代後半まで存続し、恭仁京条坊の影響は数十年間残るが、その後は、条里制再施工によって主軸 a に戻る地点と、戻らず主軸 b が存続する地点に分かれる。戻らない地点については、恭仁京条坊の影響がその後の地域発展で無視できなかつたことを暗示するのであろう。

例えば、「作り道」である。恭仁京廃都後も右京域に存続し、地割に残った稀有な遺構である。南北に縦走する古道で、その幅員は幅10m前後に復元され(足利1969)、位置によって主軸の向きは異なるが、奥村清一郎は全体的には主軸 b とする(奥村1980)。また、上述のとおり、八後遺跡の調査成果からも、主軸 b と判断される。他の地点の地割が主軸 a に復帰したにもかかわらず、「作り道」が主軸 b のまま、奈良時代以降も存続した理由は、「作り道」が、主軸 b の時期である天平13(741)年に行基が架橋したとされる泉橋に接続し、長期にわたって官道及び街道として機能したためと考える。「作り道」は中つ道の延長線上にあたり、恭仁京期以外にも幹線道路として機能した。こうした重要なインフラは、恭仁京廃都後も存続したため、条里制再施工後も主軸 a への復帰ができず、主軸 b が残ったと推測する。この他の地点についても、主軸 b を存続させる何らかの理由があつたのであろう。

そして、他方で、主軸 b が恭仁廃都後も数十年間存続したにもかかわらず、主軸 a に復帰する地点が多く認められることは、主軸 b が、一定期間を費やしても、主軸 a を「上書き」し切れなかつたことを示している。右京域では、遷都初期の主軸である主軸 a での造営が期間は極めて短いとは言えども、ある程度進んでいたことを示すと言えるだろう。右京域は、恭仁京以前から平城京の外港である泉津が存在し交通網の結節点であったことから、初期の主軸である主軸 a での造営が、あるいは数か月程度先行して進んでいた可能性も想定しうる。さらに、主軸 a を採る条里地割の施工も右京域及び京域外の相楽郡で一定進められていたことも想定される。それが故に、主軸 b から、主軸 a に戻されたと推測する。

主軸 a と主軸 b の地割が混在する右京域に対し、左京域の条里地割の主軸は、一貫して主軸 b である。主軸 a での造営があまり進んでいなかったと考えられる。実際の発掘調査成果からも、宮域では、恭仁宮造営に伴う整地層の上面から切り込む主軸 z の柱穴列が検出されている。また、宮及び左京域は、丘陵に囲まれた完結した地形で、南北に開放された地形である右京域とは環境が異なり、そのために恭仁宮・京の主軸である主軸 b が現代に至るまで地割に残ったと考えられる。筆者は、左京域でも右京域と同様に、当初は主軸 a による全体デザインが存在したと推測するが、現在の地割には踏襲されておらず、発掘

調査事例も無いため、この予察の是非は将来の調査に委ねたい。

5. おわりに

恭仁京には、恭仁宮(第2図右)と同様に、主軸 a と主軸 b による2つのプランがあったと考える。恭仁京の復元研究を今後進めるにあたっては、2つの恭仁京を念頭にこそ、実像を解き明かせるのではないだろうか。恭仁京研究の嚆矢となった足利説も、足利説を克服しようとしたその後の各説も、いずれも一定の説得力があるが、同時に、全ての説は恭仁京が首尾一貫した1つのプランで造営されたという前提に立っている。都城研究では当然の前提ではあるのだが、本稿では、宮域の調査成果から、その前提にあえて疑問を投げかけてみた。

また、近年の恭仁京復元案として、山田邦和の不定形プラン説(山田2019)があるが、私は、この説も成り立ちうると考えている。本論で指摘したとおり、デザイン変更による主軸の変更が為され、かつ京域が未完成であれば、当事者たちの誰もが当初指向していなかった不定形プランの都城が現前し、そのまま恭仁京は廃都になった可能性が高いからである。

すなわち、恭仁京の復元研究については、実現しなかった2つの設計と、さらに、実態としての不定形な状態を加えた、3つの像を思い描く必要があると考える。

なお、本稿は恭仁京の復元案を出すことが主眼ではないため、足利説以降の、多様なアプローチから恭仁京に迫った研究をほとんど紹介できていない。今後、筆者独自の恭仁京復元案を提示することがあれば、その際に改めて検討の対象としたい。

(ふるかわ・たくみ=京都府教育庁指導部文化財保護課主査)

注1 恭仁宮跡の発掘調査では銅烏幢の遺構は未検出であるが、発掘調査から、この宝幢(幢旗)遺構は各宝幢(幢旗)が18尺等間で並ぶことが判明している。銅烏幢の西に隣接する月像幢が検出されているため、銅烏幢の位置の特定は可能である。

注2 続日本紀の天平十二年十二月六日条には、遷都の際に恭仁宮建設予定地と推測される地点に「恭仁郷」が存在したことが記されている。

注3 S D04の主軸について、報告書の報文では「北半でやや屈曲して約4度東に振れる」と述べられているが、図からは東に振れるようには見受けられない。一方で明らかに座標北から東に振るS D06についても同様に、「約4度東にふれる」と述べられるが、図から、S D06についてはこの表現は妥当と判断される。報文では、S D04・06の主軸を混同しているのではないか。

注4 ただし、奥村・平良は、最初の主軸 a を、恭仁京期以前の、恭仁京とは無関係に施工された条里地割とし、恭仁京期に条坊地割の主軸である主軸 b が施工された際、短命の都であったために主軸 b が徹底されずに2つの主軸が混在したと推定している。一方、本稿では、主軸

aが恭仁京にも積極的に用いられ、主軸 a による右京域全体の設計が存在したと推定するため、主軸の混在についての評価は異なる。

参考文献

- 足利健亮 1969 「恭仁京の歴史地理学的研究・第一報－現景観の観察・測定にもとづく朝堂院・内裏・宮域および右京『作り道』考－」『史林』52－3 史学研究会
- 足利健亮 1973 「恭仁京域の復元」『社会科学論集』4・5 合併号 大阪府立大学社会科学研究会
- 足利健亮 1985 『日本古代地理研究－畿内とその周辺における土地計画の復元と考察－』大明堂
- 伊野近富 1992 「樋ノ口遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 48 冊（財）京都府埋蔵文化財調査センター
- 伊野近富・筒井崇史 2005 「片山遺跡第 2・3 次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 116 冊（財）京都府埋蔵文化財調査センター
- 岩松保 1988 「八後遺跡・恭仁京跡（作り道）」『京都府遺跡調査概報』第 28 冊（財）京都府埋蔵文化財調査センター
- 奥村清一郎 1980 「恭仁京右京条坊の復原」『木津町埋蔵文化財調査報告書』第 3 集 木津町教育委員会
- 平良泰久・奥村清一郎ほか 1980 「上津遺跡第 2 次発掘調査概報」『木津町埋蔵文化財調査報告書』第 3 集 木津町教育委員会
- 筒井崇史 2012 「上粕北遺跡第二次」『京都府遺跡調査報告集』第 150 冊（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 筒井崇史・松尾史子 2014 「木津川市上粕北遺跡出土遺物の基礎的研究（1）」『京都府埋蔵文化財情報』第 123 号（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 福山博章ほか 2020 「一般国道 163 号線木津東バイパス関係岡田区に遺跡第 3～6 次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第 180 冊（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 古川匠 2020 a 「恭仁宮の構造と造営順序」『条里制研究』第 35 号 条里制・古代都市研究会
- 古川匠 2020 b 「恭仁宮中枢部の儀礼空間とその構成－元日朝賀関連遺構の分析から－」中尾芳治編『難波宮と古代都城』同成社
- 松本秀人 1981 a 「上津遺跡第 3 次発掘調査概報」『木津町埋蔵文化財調査報告書』第 4 集 木津町教育委員会
- 松本秀人 1981 b 「木津遺跡第 2 次発掘調査概報」『木津町埋蔵文化財調査報告書』第 4 集 木津町教育委員会
- 森正編 2000 『恭仁宮跡発掘調査報告Ⅱ』京都府教育委員会
- 山田邦和 2019 「恭仁京復元への試案」『京都を学ぶ [南山城編]』ナカニシヤ出版